2025.04.17

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

地域日本語支援ニュース　こだま　第 454 号

ともに生きる

〜地域で、日本で、そして世界で〜

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

★―― メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。――★

【地域日本語支援ニュース　「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★――　皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。――★

編集部：https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html

■新年度のごあいさつ■

公益社団法人 国際日本語普及協会（AJALT）

理事長　戸　田　佐　和

3 月 28 日にミャンマー中部で発生した地震により犠牲となられた方々に対し、謹んで哀悼の意を表するとともに被害に遭われた方々に心よりお見舞いを申し上げます。

東京は、寒の戻りがあったものの、満開の桜とともに 4 月を迎えました。いつもメールマガジン「こだま」をお読みいただきましてありがとうございます。

この一年も各地で活動されている方々のご寄稿を拝読し、勇気づけられました。心からお礼を申し上げます。

「こだま」は、読者のみなさまの、温かいご支援に支えられ 22 年目のスタートを切ることができました。

昨年末、私はあるウクライナの青年と 2 年ぶりに再会を果たしました。私にとってその青年との再会は、改めて「社会的存在」（注 1）とは何かを考える貴重な機会となりました。今回のご挨拶では、このことをみなさまと共有させていただきたいと思います。

シェフチェンコ（仮名）さんに初めて会ったのは、2022 年の暮れでした。相談したいことがあると、インターンシップをしていたスタートアップ企業の上司と一緒に当協会を訪ねてきてくれました。きっかけは、当時、当協会

が発刊したばかりのウクライナ避難民向け日本語教材『あおぞら』（注 2）を読み同胞（どうほう）のために開発を考えている日本語学習アプリに内容の一部を使わせてもらえないかということでした。終始穏やかな落ち着いた口調（くちょう）で、戦禍を逃れて来日したこと、現在、日本語学校に在籍していること、どのようなアプリを作りたいかなどのお話をされました。

それから 2 年が経ちました。その後どうなさっているかと思い、今度は私からもう一度お会いしたいと連絡をして 1 時間ほどおしゃべりをしました。

シェフチェンコさんは、子どもの頃から日本のアニメが大好きで、テレビで放映されているアニメをよく見て、いつしかそのアニメを字幕なしで理解したいと思い始め、最初は独学で日本語を勉強していました。その後、ウクライナ人の日本語の先生に出会い、高校 3 年間、放課後にレッスンに通います。先生のおかげで日本語の基礎が身についたそうです。大学に入学して間もなく、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、途方に暮れていたところ、幸運にも避難民学生に対する奨学金を得て、2022 年 5 月に来日しました。日本語学校に通いながら、9 月からは、IT 企業のインターンシップとして働き、日本語学習アプリの開発を始めます。AI が記憶をサポートするツールを使って、日本語のコンテンツを作り、ウクライナ支援に携（たずさ）わりました。現在、多くの学習者が使用しているそうです。

ここまで順調に来たと話していたシェフチェンコさんでしたが、話しているうちに、実は苦しい時期があったことを打ち明けてくれました。

来日からほぼ半年間、午前中は日本語学校、そのあと夕方までアルバイト、夜は在籍しているウクライナの大学の授業と、とにかく時間に追われ、全く時間的にも肉体的にも余裕がなく毎日精いっぱいであった。ただただ懸命に日々を過ごす中、あるときこの日本社会において自分の存在、一体何のためにここで暮らしているのか、自分は社会の一員であるのかどうかわからなくなり、涙が止まらない時期があったそうです。

会社に入ってから、周りの人に本音を伝えることができたら、相手も本当の気持ちを教えてくれるはずだと思って同僚に胸の内を話してみた。そうしたところ、気持ちを受け止めてくれ、自分を理解してもらえた。本当に嬉（うれ）しかった。そして、同胞（どうほう）のための日本語学習アプリを開発したことにより、自分はみなさんの役に立てているという実感も湧（わ）いてきて、ようやく「社会の一員」になれたという確信を得たと話してくれました。

21 歳となった今、堂々（どうどう）と、淡々（たんたん）と語る様子にシェフチェンコさんにとっての 2 年という歳月（さいげつ）の重みと経験、その間の努力、困難を乗り越えた自信が伝わってきました。もちろん、周囲の

方々の理解、サポートがあり、大きな支えになっていることは言うまでもありません。

世界情勢はますます混迷しており、報道に胸を痛める日々です。　対話による停戦が実現し、ひとりでも多くの命が救われることを祈ります。シェフチェンコさんは、戦争については、あまりにも重すぎるので今は語れないと述べていたことが忘れられません。

今年度も引き続き、「こだま」のテーマは「ともに生きる〜地域で、日本で、そして世界で〜」です。これからも読者のみなさまの地域でのさまざまな取り組みが共有され、他の地域の参考になればと願っています。ぜひ、原稿をお寄せください。

（注 1）「日本語教育の参照枠」における言語教育観の柱のひとつとして「日本語学習者を社会的存在として捉える」という考えがあります。
「学習者は、単に「言語を学ぶ者」ではなく、「新たに学んだ言語を用いて 社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存である。言語の習得は、それ自体が目的ではなく、より深く社会に参加し、より多くの場面で 自分らしさを発揮できるようになるための手段である。」（「日本語教育の参照枠　報告令和 3 年 10 月」ｐ 6 より抜粋）

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf
詳しくは上記報告をご覧ください。

（注 2）『あおぞら』は、ウクライナから来日した方々の日本語学習をサポートするために作られた教材です。現在ウクライナ難民の方々に無償寄贈しております。詳細は以下をご覧ください。
https://www.ajalt.org/